

米粉調製品の輸入実態とその影響

1 米粉調製品の内容

米粉調製品は、米粉に砂糖やでん粉を混入したもので、米粉の含有量が85%以下のものは、昭和37年から輸入が自由化(関税率16~28%)されている。

なお、米粉の含有量が85%を超えるものは、米と同様の税率(341円/kg)となるため、我が国への輸入は4万トン程度(平成13年)と、ほとんど行われていない。

2 これまでの輸入の経緯

米粉調製品の輸入量は、平成3年までは2万トン程度で推移していたが、平成3年から5年にかけての国内米需給のひっ迫、為替レートの上昇等により、平成4年以降増加し始め、平成6年には、平成5年産の大不作による加工原材料用米の不足に対応して急増した(平成6年輸入量:17万トン)。

平成7年には輸入量は減少した(輸入量8万トン)ものの、それ以降は、おおむね10万トン程度前後で推移して、現在に至っている(参考1)。

なお、この他に、製品輸入として、米菓が6,000~7,000トン程度、ビーフンが4,000トン程度、米を含む肉、魚等の調製品が1,000トン弱、それぞれ年間輸入されている(参考2)。

3 輸入の実態

(1) 国別輸入動向

米粉調製品は、タイ、米国、中国からの輸入が大宗を占め、平成13年では、タイ47,316トン、米国27,132トン、中国24,995トンとなっている。

もち米粉が主流のタイは微増、アメリカは横這いないし微減、中国は微増傾向で推移している(参考3)。

(2) タイプ別輸入動向

米粉調製品を加糖、無糖別にみると、平成4年までは加糖（関税率24%）の割合が9割程度を占めていたが、平成5年以降無糖（関税率16%）の割合が増加し、平成13年では6割強となっている（参考4）。

なお、無糖のものは、85%の米粉にスターチを混入、本邦内で分離せず直接製品化が可能であるといわれている。

(3) 使用原料別分類

通関統計上、米粉調製品はもち米粉、うるち米粉別に仕訳されていないが、輸入業者からの聞き取り、需要者の使用実態等から推計すれば、おおむね、もち米粉7：うるち米粉3と推計される。

近年、もち米粉を原料とするものの輸入が増加している（参考5）。

(4) 輸入価格

加糖、無糖別の輸入価格に関税、港湾諸経費等を加えた米粉調製品の仕入れ価格（試算）は、次のとおりである。

加糖のもの

$$\begin{array}{l} \text{通関価格}^{(注)} \quad \quad \quad \text{関税 (24\%)} \quad \quad \quad \text{港湾諸経費等 (通関価格の10\%)} \\ 72.2 \text{ 円/kg} + 17.3 \text{ 円/kg} + 7.2 \text{ 円/kg} \quad \quad = 96.7 \text{ 円/kg} \end{array}$$

無糖のもの

$$\begin{array}{l} \text{通関価格}^{(注)} \quad \quad \quad \text{関税 (16\%)} \quad \quad \quad \text{港湾諸経費等 (通関価格の10\%)} \\ 78.8 \text{ 円/kg} + 12.6 \text{ 円/kg} + 7.9 \text{ 円/kg} \quad \quad = 99.3 \text{ 円/kg} \end{array}$$

(注) 通関価格は平成13年の加糖、無糖別の加重平均価格

(参考)

MA米の販売価格 120～131円/kg（うるち中粒種破碎精米）
加工用米販売価格 160円/kg（破碎精米）

(5) 用途

米粉調製品は、主に和菓子メーカーや米菓メーカーにおいて、以下のとおり、もち、だんご、米菓などの原材料として使用されているとみられる。

うるち、もち別	加糖、無糖別	用途	使用理由
もち米粉	加糖	大福等	製品により砂糖を分離して国内で製造された米粉とブレンドして使用、分離せずに使用の両方
	無糖	切り餅	早く硬くなるので作業時間が短縮
うるち米粉	加糖	団子、柏餅	製品により砂糖を分離して国内で製造された米粉とブレンドして使用、分離せずに使用の両方
	無糖	米菓	澱粉混入品はふっくらと焼き上がるソフトに仕上がる

4 評価

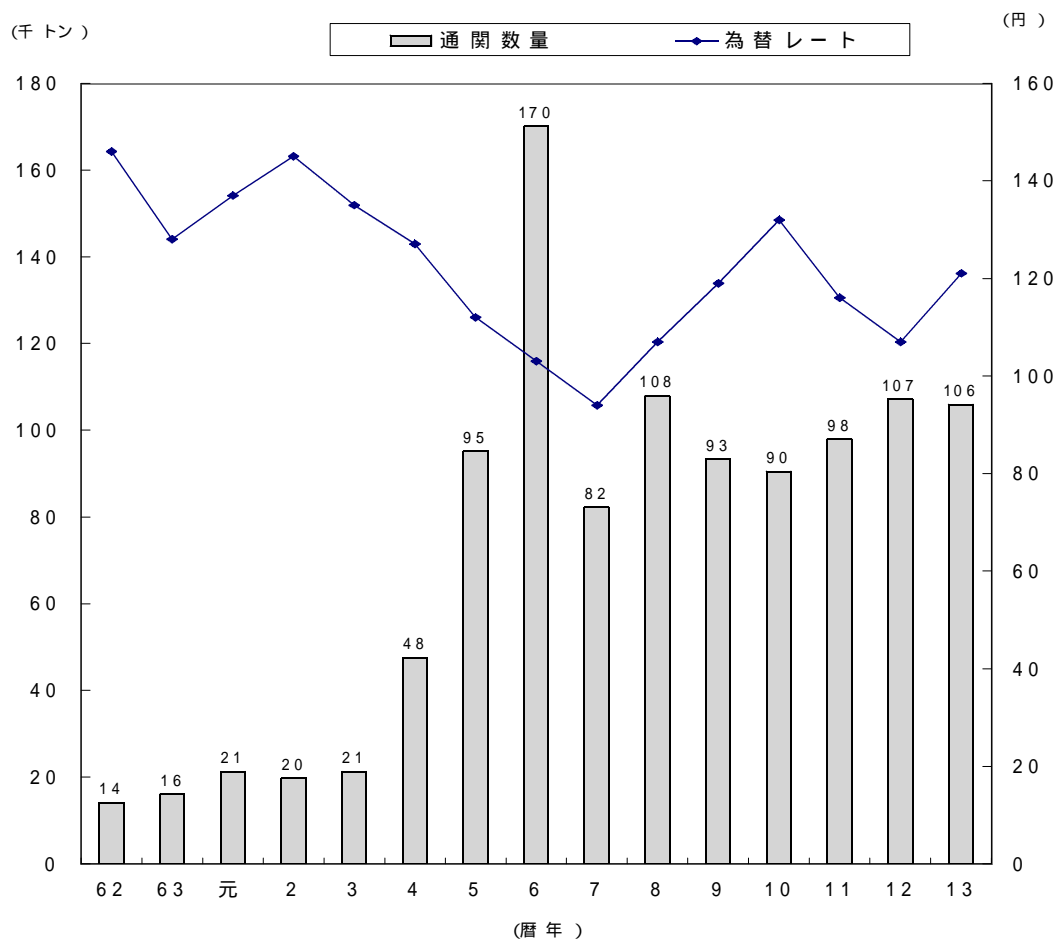
現状では、米粉調製品の一部は、米菓等の米加工品製造業者の安価な原材料用需要に充当されており、加工用米、くず米、ミニマム・アクセス米等と競合関係が生じている。

特に、近年、うるち米粉に比べもち米粉の増加が目立っているが、これは、加工用に供給されるうるち米は安価な加工用米、ミニマム・アクセス米が中心であるのに対し、もち米は自主流通米中心であることから、加工業者がもち米について消費者の低価格志向等に応えるため、より安価な原料を求めているものと推測される。

このことは、加工業者の低価格の原料に対するニーズに応えているものの、もち米全体に対する需要の減少とも相まって、国内産もち米の需要規模の減少につながっていることは否定できない。

このため、加工原材料用米の需要に応じた価格での安定供給により、原料米の振替を推進していくことが必要である。

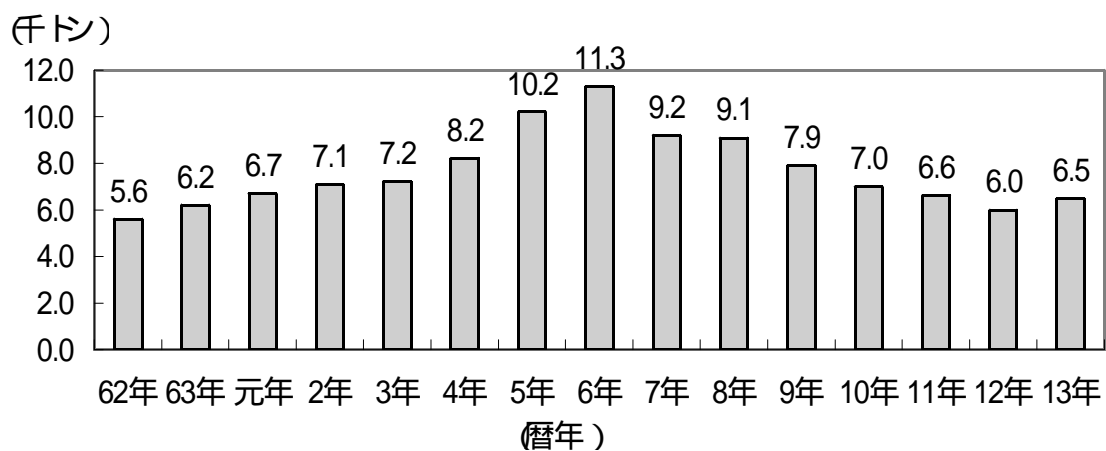
(参考1) 米粉調製品の通関数量



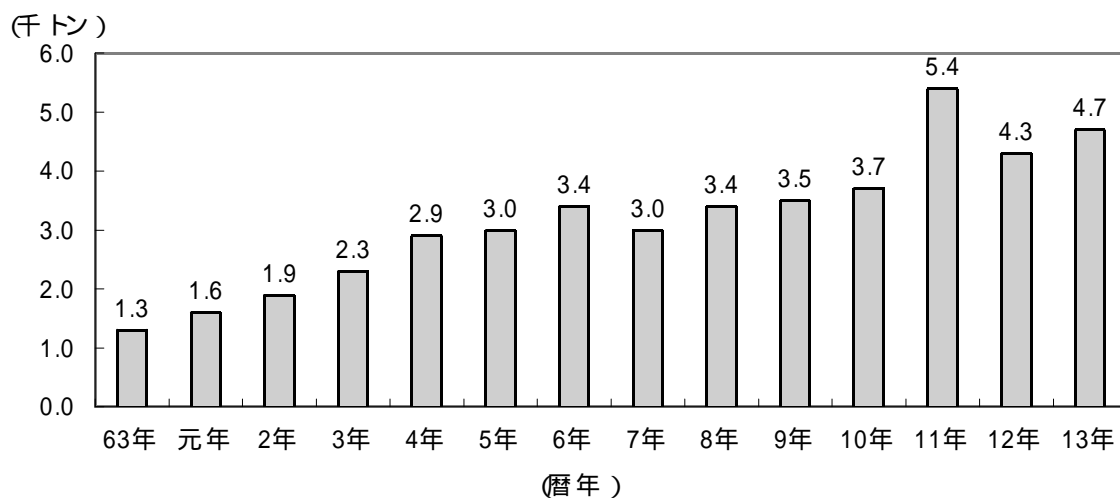
資料：財務省「日本貿易月表」、為替レートは対USドル。

(参考2) 米菓、ビーフン及び米を含む肉、魚等の調製品の通関数量

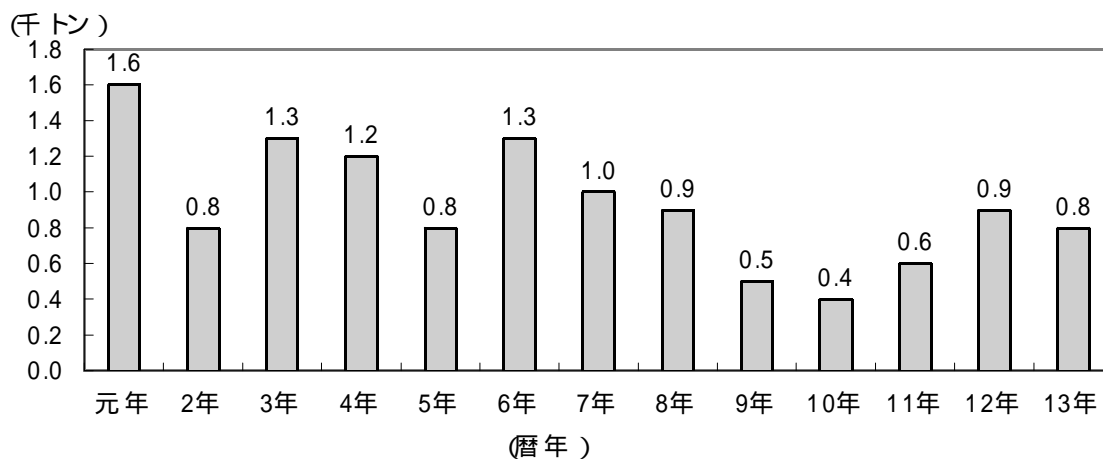
米菓



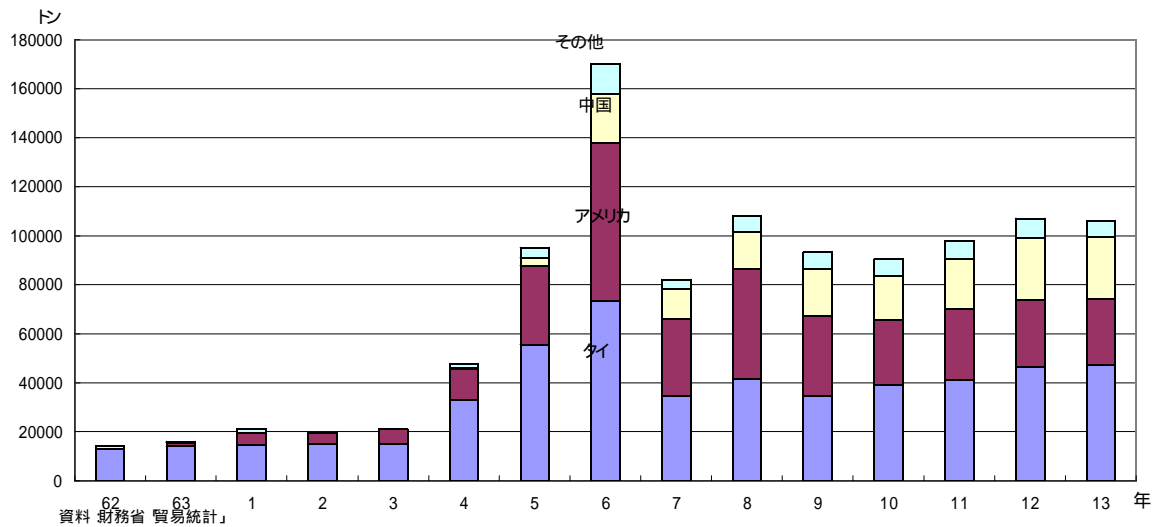
ビーフン



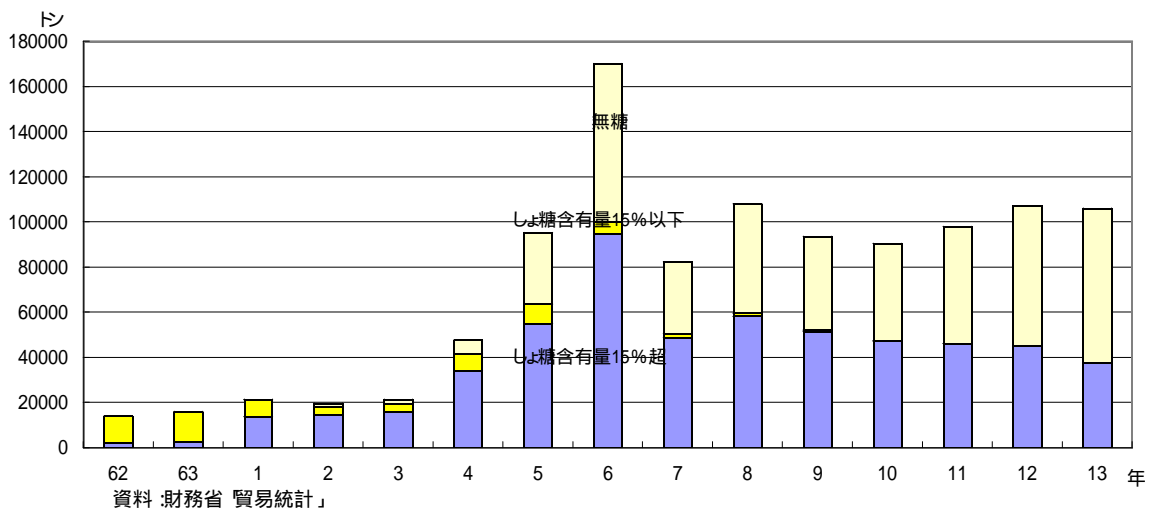
米を含む肉、魚等の調製品



(参考3) 米粉調製品の国別輸入数量の推移



(参考4) 米粉調製品のタイプ別輸入数量の推移



(参考5) 米粉調製品のもち・うるち別数量

(単位:千トン)

輸入年	もち	比率	うるち	比率	合計
9	58	62%	35	38%	93
10	61	67%	30	33%	90
11	65	67%	33	33%	98
12	73	68%	34	32%	107
13	73	69%	33	31%	106